

会話を維持するためのコミュニケーション・ストラテジー —日本人英語学習者のスピーキング・テストにおける会話の分析—

市川 ゆりえ

要旨

The main purpose of this paper is to describe how Japanese learners of English use the communication strategies according to their proficiency levels. This study especially focuses on the strategies to maintain conversation. In this study, “to maintain conversation” refers to the act to avoid silence in an interaction and attempt to keep the interaction with an interlocutor. In order to analyze these strategies, the study uses the data of NICT JLE Corpus which includes spoken data by Japanese learners of English. As the results of analysis, the learners having different levels have used strategies differently about the types and frequency of them. The strategies in the interaction were regrouped according to their distinctions to show clearly how the learners use them. In the discussion section, two items are discussed: the factors which affect the variation in the frequency of strategies and the effects of tasks in role play. The results of this study identified that the Japanese learners of English use the communication strategies to maintain conversation differently according to their proficiency levels.

キーワード：コミュニケーション・ストラテジー, 会話維持, ロール・プレイ, SST レベル

1. はじめに

近年、職場や学校などの日常の場面におけるコミュニケーション能力への関心が高まっている。英語教育に関して言えば、英語を話せるようになりたいと望む日本人が多くいる一方で、そのほとんどが自分の英会話能力に不安を感じている。特に初級者は、なかなか会話を継続することができず、相手の問いかけに依存して黙ってしまいがちである。本稿は、日本人英語学習者によって使用されるコミュニケーション・ストラテジーが、話者のスピーキングレベルによって、どのように異なって用いられているか、スピーキング・テストにおける会話内容を収録したスピーキング・コーパスのデータを分析することにより、明らかにしたものである。従来の同分野の研究では、分析対象とするコミュニケーション・ストラテジーは話者個人の言語能力の不足を補うものであり、対話者とのやり取りの中で用いられ、会話を積極的に進めるのに役立つストラテジーに関

する研究はまだ十分行われているとはいえない。そこで、本研究では、日本人英語学習者が用いるコミュニケーション・ストラテジーの中で、特に会話の維持に関わるストラテジーに着目し、分析を行った。

2. 先行研究

2. 1 コミュニケーション・ストラテジーの実証研究

コミュニケーション・ストラテジーに関する実証研究では、第二言語学習者の習熟度レベルとストラテジー使用の関連に関して、多くの研究がなされている。また、特に会話能力試験に関しては、受験者と試験官の間の会話において受験者が用いるストラテジーについて研究がされている。Paribakht (1985) は、目標言語の習熟度レベルとコミュニケーション・ストラテジーの使用の関係を調べた。学習者のストラテジー使用はそれぞれの発達段階によって特徴が見られることがわかっている。

次に、Chen (1990) は、目標言語での会話において高い、または低い習熟度を持つ 12 人の中国人英語学習者が用いるコミュニケーション・ストラテジーについて調べた。Chen は学習者が用いるストラテジーの頻度や種類や上手さが彼らの習熟度レベルによって異なることを発見した。これらの 2 つの研究は、話者自身の発話について焦点を当てたものである。また、語彙項目を説明するというタスクが与えられた被験者の発話に確認されたストラテジーであり、話者とのやりとりの中でストラテジーがどのように有効に使用されているか、といった側面は考えられていない、といえる。

それから会話能力試験における受験者が用いるコミュニケーション・ストラテジーに関しても、同様な研究がなされている。まず、Yoshida-Morise (1998) は、インタビューテストの状況で用いられたコミュニケーション・ストラテジーの性質と頻度について明らかにした。この研究では、学習者の習熟度レベルとコミュニケーション・ストラテジーの使用の関係について調べているが、被験者数が 12 と少ないことが指摘できる。

次に、Katona (1998) も会話能力試験におけるコミュニケーション・ストラテジー使用について調べている。この研究では同じく 12 人のハンガリー人英語学習者を対象に調査しており、同様に被験者数が少ないといえる。また、この研究では、“survival strategies” という会話維持のためのストラテジーに言及しているが、それについて詳細に述べられているとは言えない。

3. 研究課題

以上のような先行研究における問題点をふまえて、本研究では、以下の研究課題を設定する。SST (スタンダード・スピーキング・テスト) を受験した、日本語を母語とする日本人英語学習者によるロール・プレイでのやりとりに関して、

1. 受験者が用いる会話維持のためのコミュニケーション・ストラテジーは、受験者の習熟度レベル（初級・中級・上級）によって、その数と種類に差が見られるか。
2. Q1 でもし差が見られるなら、そこにはどのような特徴があるか

4. 研究方法

4. 1 データ

学習者の使用するコミュニケーション・ストラテジーを分析するために、スピーキング・コーパスのデータを使用した。以下にその概要とコーパスに収録されている発話データの元となるスピーキング・テストについて説明する。

4. 1. 1 The NICT JLE コーパス

本研究では、日本人英語学習者の発話を対象にしたスピーキング・コーパスの一つである The NICT JLE コーパスを使用した。このコーパスを使用した理由は3つ挙げられる。第1に、まずこのコーパスからはすでに文字起こしのなされた話し言葉のデータを十分な量得ることができること。第2に、このコーパスのデータは日本人英語学習者の発話データであること。学習者によるアウトプットの結果を集めた学習者コーパスはいくつかあるが、それらは一部書き言葉のデータであったり、日本語を母語とする話者の発話をあまり含んでいなかったりする。第3に、データ間の比較が容易であること。なぜなら、データの元となる SST（スタンダード・スピーキング・テスト）は決められた評価基準にもとづいてレベル分けがなされており、行われる試験の手順も統一されているので、一部を取り出して比較することが可能である。

4. 1. 2 SST（スタンダード・スピーキング・テスト）

次に、上のコーパスに収録されているスピーキング・テストの内容について触れる。SST はアルクによって実施されている対面式のスピーキング・テストで、約 15 分間試験官によるインタビュー形式で行われる。テストは 5 つのセクションに分かれており、最初と最後に行われる緊張をほぐすための簡単な質問、絵の描写、ロール・プレイ、ストーリー作り、からなっている。

4. 2 分析対象

ALC Press (2006) は 9 レベルを 3 つにカテゴリー分けしている。すなわち、レベル 1 から 3 を初級、4 から 8 を中級、9 を上級としている。本研究では、コーパスデータに付与されている 9 段階の SST レベルのうち、初級・中級・上級からレベル 2、レベル 4、レベル 9 を選択した。レベル 1 は沈黙が多く、発話量も少ないため、ストラテジーの使

用を確認するのは困難とみなし、除外した。また、分析対象には SST の 5 つのステージのうち、ロール・プレイ部分のみを選択した。ロール・プレイ状況を分析対象に選んだのには 2 つ理由がある。1 つには、タスクのなかでやりとりが行われているという点、もう 1 点は、特定の目的（例えば電車の切符を買うなど）を達成する必要があるため、積極的なやりとりが見られると考えられるからである。

4. 3 分析方法

分析には戦略・リストを作成し、それぞれの会話の中の頻度を調べていく手法をとった。戦略・リスト作成のため、9 つのレベルから 3 データずつ抜き出して Nakatani (2005a, 2005b) に基づいて戦略を分類し、パイロットテストを行った。当てはまらないと考えられる戦略は追加し、計 20 の戦略・リストを作成した。それによって各レベル 30 ずつ会話データを抜き出して分析した。

5. 結果

分析の結果、レベル 2 から 4 で戦略数は増加し、4 から 9 で減少した。全てのレベルにおいて **Time-gaining** が半数以上用いられていた。各レベルをくわしく見てみると、レベル 2 では、**Reduction strategies** が最も多く用いられ、話者が話したい表現をあきらめ、日本語を一部使用することによって、乗り切っているのが見られた。また、レベル 4 では、**Response for maintenance** の中で特に **Providing active response** が最も多く用いられた。レベル 9 では、同じく **Response for maintenance** の中で **providing active response** が最も多く用いられた。

また、どんな性質の戦略が特定のレベルに多く使用されているかわかりやすく観察するために、いくつかの特徴に焦点を当て、戦略群を再度グループ化した。例えば、会話に対して積極的であるか、あきらめようとするかという点、また対話者を必要としているか、話者自身の発話の中だけで使用するものか、などの特徴に注目した。再度グループ分けされた戦略は、各グループで総数を出し、そのレベルごとの推移をパーセントで示した。観察された戦略は、以下の表 1 に示されており、表 1 の結果を上位分類にまとめたものが表 2 である。再度グループ分けを行った結果を表 3 から 5 で示した。

表1 各レベルで用いられたストラテジー

		Level 2	Level 4	Level 9
	Achievement strategies			
a	Help-seeking strategies			
a-1				
a-1-1	Appeal for help	0	0	3
a-1-2	Asking for repetition	6	1	0
a-2				
a-2-1	Asking for information	0	13	12
a-2-2	Asking for opinion	0	11	5
b	Modified interaction			
b-1	Clarification requests	3	2	4
b-2	Confirmation check	2	2	1
b-3	Comprehension check	1	6	0
c	Modified output			
c-1	Modified output	0	3	7
c-2	Additional explanation	0	0	2
d	Time-gaining			
d-1	Use of fillers	114	94	77
d-2	False start	40	62	26
e	Response for maintenance			
e-1	Providing active response	12	18	33
e-2	Shadowing	15	41	8
e-3	Expression of feeling	0	2	4
f	Self-solving			
f-1	Paraphrase	1	2	3
f-2	Approximation	0	2	0
f-3	Restructuring	10	43	19
	Reduction strategies			
g	Message abandonment	35	4	0
h	First language-based	45	29	2
i	Interlanguage-based	8	6	0
Total		292	341	206

表2 ストラテジー数の推移

	Level 2		Level 4		Level 9	
		%		%		%
Help-seeking strategies	6	2	25	7	20	10
Modified interaction	6	2	10	3	5	2
Modified output	0	0	3	1	9	4
Time-gaining	154	53	156	46	103	50
Response for maintenance	27	9	61	18	45	22
Self-solving	11	4	47	14	22	11
Reduction	88	30	39	11	2	1
total	292	100	341	100	206	100

表3 Achievement and Reduction strategies (Regrouping-1)

	Level 2	%	Level 4	%	Level 9	%
Achievement strategies	204	70	302	89	204	99
Reduction strategies	88	30	39	11	2	1
total	292	100	341	100	206	100

Achievement strategies は (Table 1 の) a~f、Reduction strategies は g~i を合計したもの。

表3では、意思の伝達を途中であきらめたり、日本語を使用したりするストラテジーを Reduction strategies として会話の進行においては消極的なストラテジーと考え、それ以外を積極的なストラテジー、Achievement strategies とした。この分類をレベルごとに行うと、Reduction strategies はレベルが上がるごとにほとんど使用されなくなり、逆に Achievement strategies の割合が増加した。中級以上の学習者は会話を途中で放棄するのではなく、なんらかの他のストラテジーを利用してその場を切り抜けようとしていると考えられ、Reduction strategies は初級者に特有のストラテジーと言える。

表4 Interactional and Personal strategies (Regrouping-2)

	Level 2	%	Level 4	%	Level 9	%
Interactional strategies	39	19	99	33	79	39
Personal strategies	165	81	203	67	125	61
total	204	100	302	100	204	100

Interactional strategies は a,b,c,e Personal strategies は d と f を合計したもの。

表4では、対話者を必要とするかどうか、でストラテジーを分類した。時間かせぎのためのストラテジーを個人で使用するものとしていることから、どのレベルの話者も全ストラテジー数の半分以上は Personal strategies となるが、Interactional strategies の割合だけを取り出してみると、レベルごとに増加しているとわかる。これにより、レベルが上がるにつれて、話者自身が自分の発話内だけで問題を解決するのではなく、対話者に働きかけていくストラテジーが使用できるようになってきていることが読み取れる。

表5 Maintenance strategies (Regrouping-3)

	Level 2	%	Level 4	%	Level 9	%
Maintenance strategies	193	66	255	75	182	88
total	292	100	341	100	206	100

Maintenance strategies は a~e を合計したものである。

最後に、表5では Reduction strategies と Self solving strategies を除く全てのストラテジーを特に会話維持に関わるストラテジーとして考え、総数を計算した。すると、ここでもストラテジー数自体は減少しているもののレベルが上がるごとに使用頻度が増加していることがわかった。

次に、各レベルのデータを抜き出し、具体的にどのような会話が試験官と受験者の間で行われていたかを見る。データ内の A は試験官、B は受験者である。

Level 2

<A> OK. Urm, how many people...are going?

 ...One.

<A> OK. Do you want first class or economy?

 Economy, please.

<A> [laughter] All right. Uhm, what day next week do you want to go?

 Monday.

<A> OK. Urm...all right. What do you want to do in Hawaii?

 I want to swimming.

<A> Uhm, OK. So let me book a ticket. OK? (file00955)

これは、旅行会社で飛行機のチケットを購入する場面である。試験官の発話は全て質問で成り立っており、受験者は1語または数語でしか答えていないが、会話は継続している。Level 2における会話では、試験官の工夫によって、かなり答えやすい問いがされている。工夫とは例えば A か B かといった選択肢が提示されるといったものである。

このデータの状況の場合、店員と客という立場の問題（客は店員のために多く話そうとする必要はない）が存在し、自然会話の場合に起こるような相手の発話への配慮・関心はないことも考えられる。続いて、以下にレベル4の受験者のやりとりを見る。

Level 4

- Ah. Urrr, doushiyo. Uunto, Hmm. Please tell me another way to New [laughter] York.
<A> Mhm. There is express train that starts in ten minutes.
 Ten minutes. Oh, thank you. Oh, how much, how much?
<A> It's fifty dollars.
 Fifty dollars. Erm. Mhnm. So, er, yes, thank you. And, hm, where hm, where do I buy ticket?
<A> Uh, here. You can buy it from me.
 A thank you...Eeto. [cough] Where can I, can I go to , er, take express?
<A> Over there.
 Over there?
<A> It's platform one.
 Platform, platform one? Mhmm. Thank you. And when, when start, er, when does express starts?
<A> In ten minutes.
 In ten minutes?
<A> Uh-huh.
 Er, thank you. (file00043)

このやりとりでは、乗客が電車の切符を買おうとしている。受験者は相手の発話を繰り返すストラテジーである **Shadowing** を多用し、自分の理解度を確認している。ここで使用される **Shadowing** には2種類の機能があると考えられる。1つには理解したことを示すもの、2つめは理解した内容を確認するものである。ストラテジーの識別の過程では「同じ単語を繰り返し発話しているかどうか」という形式にのみ着目して分類した。話者にとっては「相手の言った言葉を繰り返す」という1つのストラテジーなのではと考えられるからである。

次に上級者であるレベル9の会話例を参照する。

Level 9

- Em, I just came back to the room, and, er, my window is broken. Em. Can you fix it as soon as possible?
- <A> Oh. I'm, er, right now very busy. I'm, I'm afraid I cannot come right away.
- Yeah, I understand that. But I mean that it's cold, and the window is broken, and, I mean, er, what I'm going to do it with it? If.
- <A> Yeah. I know. I have some emergency matters I have to take care right now.
- Well. This is emergency, too, you know. I mean, I don't know maybe some broke in or something. But, I mean, eh, it's, it's dangerous, too, if the wi, window is broken. I mean someone can come in easily, too. I live here alone.
- <A> Yeah, er, maybe I could come tomorrow night?
- Em. How about tonight?
- <A> Eh, uh. That's gonna be very difficult.
- Em. Wh, why is that?
- <A> Oh. Just so many things I have to take care of. (file00319)

この場合、レベル9の受験者に対して、家主と住民の会話という状況が与えられている。住民は家主に壊れた窓の修理を依頼しているが、断られる。上級レベルでは、明らかに試験官の協力はなく、会話維持は受験者の努力による。この場合は、いかに家主を説得できるかというところが評価の対象になる。会話維持ストラテジーに関しては、この上級レベルの学習者は上の会話の下線部分で相手の言ったことに積極的な反応を示す Providing active response を使用している。

6. 考察

6. 1 レベルによるストラテジー数の推移

分析によると、使用されたストラテジーの総数はレベル2から4では増加している(292→341、表1・2参照)が、4から9では減少している(341→206)。表1から、この様子が顕著にわかるストラテジーは4つある。(Asking for opinion, False start, Shadowing, Restructuring) この理由として、レベル2から4、つまり初級から中級にかけての増加は、中級の学習者が初級に比べて多様なコミュニケーション・ストラテジーを使いこなせており、使えるものは頻度も多く使用しているためと考えられる。一方、レベル4から9、つまり中級から上級にかけてのストラテジー使用の減少は、話者が十分な言語能力を持っているために、例えば相手の発話を繰り返して内容を確認したり、自分の発話を言い直したりする必要がなくスムーズに会話を続けることができる、よって上級の話者に

としてはストラテジーを使用する必要がない場合が多いため、使用されたストラテジーの総数自体は減少している、と言える。以上の理由により、初級者の場合はストラテジーの使用が多くなり、上級者になると言えないことが少なくなるためにストラテジーの使用数も減ると考えられる。

6. 2 タスクの違い

分析に用いたロール・プレイでは、試験官が受験者のレベルに応じてタスクの内容を変えている。上の会話例の抜粋で確認したように、初級者の場合は試験官の大きな助けを得て進めることができるが、上級者になるとほとんど助けはなく、受験者が自力でなんとか課題を解決しなければならない。

この点に関して、上級者のためのタスクは依頼を断られているところを説得して頼むという状況であったり、パーティの出席を断るという状況であったりし、話者が相手から情報を得る必要のないタスクであった。このため相手から情報を得ようとするようなストラテジーは積極的に用いられず、結果として上級者のストラテジー数の減少に影響を及ぼしたとも考えられる。

7. 結論

日本人英語学習者によって使用される会話維持のためのコミュニケーション・ストラテジーは話者のスピーキングレベルによって違い、または幅が見られることがわかった。幅とはつまり、同じ会話維持を目的としていても初級者は沈黙を避けるためだけにストラテジーを使用するが、上級者になると対話者とのやり取りを通じて情報を取得・提供し、会話を前に進めるためにストラテジーを用いているということを示している。レベルごとにストラテジー使用を調べた結果、初級者は相手の発話に対して反応を示すことができているということ、一方上級者は相手の発話に反応を示すことができているだけでなく、対話者から情報を引き出し、自ら提供することもできているということがわかった。また、相手の発話に対し反応を示すというストラテジー（Response for maintenance）については、使われている単語自体は平易で、かつ文章も短いものであった。そう考えると会話維持ストラテジーは学習者にとって難易度の高い（つまり使用の難しい）ものではない。しかし、結果を見ると明らかに上級者になるほど多く使用が見られた。なぜ簡単な単語で構成されるストラテジーであっても初級者には使用できなかったか、その理由は本研究では明らかにすることができていないが、話者自身の発話内だけでなく対話者へ働きかけるストラテジーも分析対象とし、レベルごとに使用に差が見られたことで、相手の発話へ関心を示すことの重要性は示すことができた。最後に、本研究では、スピーキング・テストにおける受験者・試験官の間の発話を調べたために、話者のレベルごとに試験官の対応がはっきりと異なることが分析をしていてわかった。

特に初級者に対する助けは大きく、話者がほとんど会話維持のためにストラテジーを使用できなくても、試験官の発話のおかげで会話は止まらずに継続していた。この点から、会話における対話者の役割の大きさが示唆される。一方、本研究で分析に使用したストラテジーの使用数はパーセントによって割合を出したものとどまり、各レベルにおけるそれぞれのストラテジーの使用に関して統計的に有意であったかどうかははっきり示すことができていない。これらの点を課題とし、今後も会話の中で使用されるコミュニケーション・ストラテジーについてさらに研究が必要である。

参考文献

- ALC Press. (2006). *Standard Speaking Test*. Retrieved October 25, 2007, from ALC Press Website:<http://www.alc.co.jp/edusys/sst/proficiency.html>
- Chen, S.-Q. (1990). A study of communication strategies in interlanguage production by Chinese EFL learners. *Language Learning*, 40, pp. 155-187.
- Katona, L. (1998). Meaning Negotiation in the Hungarian Oral Proficiency Examination of English. In Young, R. and He, A. W. (Eds.) *Talking and Testing: discourse approaches to the assessment of oral proficiency* (pp.239-267). Amsterdam: John Benjamins.
- Nakatani, Y. (2005a). *Oral communication strategy kenkyu*. [A study on the Oral communication strategies] Tokyo: Kaibundou publishing.
- Nakatani, Y. (2005b). The effects of awareness-raising on oral communication strategy use. *Modern Language Journal*, 89, pp.75-90.
- Paribakht, T. (1985). Strategic competence and language proficiency. *Applied Linguistics*, 6, pp. 132-146.
- Yoshida-Morise, Y. (1998). The use of Communication Strategies in Language Proficiency Interviews. In Young, R. and He, A. W. (Eds.), *Talking and Testing: discourse approaches to the assessment of oral proficiency* (pp.205-238.) Amsterdam: John Benjamins